

坂の上通信

平成三十年十月二十四日
広島市立美鈴が丘高等学校
新聞文芸部(四〇三演習室)

読書体験記 2名が県代表に

ヒロシマから 伝えたいこと 2年5組 斉藤 穂香

「あの地獄を知っていながら、『知らないふり』をすることは、なにもまじって罪深いことだと考えるから書くのである。冒頭の作者の言葉に私は思わずひるんでしまった。原爆の落とした深く重い闇はいつまでも消えないことを改めて感じた。

原爆投下から七十三年。今年も広島は八月六日を迎えた。八時十五分は毎朝やってくる。しかし八月六日八時十五分、その日のヒロシマは普段と全く違う姿を見せる。私は中学三年の時初めてその日を平和公園で迎えた。ピンと張りつめた空気、厳粛な中始まる式典。圧倒的な悲しみを肌で感じて鳥肌が立った。

この本は原爆投下後の広島を舞台に父と娘の会話で話が進んでいく。主人公の美津恵は原爆で生き残ったことへの罪悪感を抱き自分を責め続ける。父は娘が前に進めるよう幻となって美津恵の前に現れ彼女を励まし続ける。親しみのある広島弁で語られているが、内容は原爆の深い闇が投影されている。

私は広島に住んでいながら原爆のことを避けてきた。怖い、知りたくない、という気持ち先立ち「知る勇氣」を持ってなかった。以前の私ならこの本を手取ることは絶対になかっただろう。そんな私が変わったのは中学三年の時「伝えるヒロシマプロジェクト」に参加したからだ。広島県内の中学生を代表して各国の駐日大使の方に英語で平和メッセージをスピーチした。私にとって大きなチャレンジだった。何度も平和公園へ行き外国の方

へインタビューをした。私が一番心に残ったのは「広島へ来るまでは原爆を落として戦争を終わらせたアメリカは正しいことをしたと思っていたけど原爆資料館などを見て、やっぱりアメリカは間違っていましたね。」という言葉だ。展示物は国を超えて言葉がなくても原爆のすさまじさ、残酷さを物語っているのだと思った。そして、家族と過ごす時間や友達と話している時、おいしいものを食べている時などに感じる幸せは、肌の色が違う言語が違っても違いはないと知った。その中で私は、外国の方と話す楽しさ、違う意見を知ることの大切さを学んだ。

1・2年生の夏休み課題である読書体験記。提出後は国語科の先生方によって審査が行われ、優秀な作品をコンクールに応募するのが例年の流れだ。今年度は、本校より2名の作品が入選作に選ばれた。新聞文芸部では、受賞した文章をデータ化し、受賞者の許可を得て全文を今回掲載した。ぜひ一読してもらいたい。

それからの私は積極的に色々なことに挑戦している。書道部の活動ではクイーンエリザベス号で来広される外国の方にしゃもじで筆で文字を書く活動をした。希望される文字は「平和」や「幸福」などが多く世界中の人が同じことを願ひ、祈っているのだと感じた。

歴史的な米朝首脳会談があったにも関わらず核廃絶の道のりは遠い。原爆が及ぼした何十年も続く身体と心への傷は戦争が終わっても一生消えない。作品の中で美津恵が「あんなときの広島では死ぬるんが自然で、生きのこるんが不自然なことやたんじゃ。そいじゃけえ、うちが生きとるんはおかしい。」と言う。せつなく生き残ったのに、どれだけ悲惨な場面を見て、辛く苦しい思いをして生きてきたのか胸が苦しくなる。原爆は生きて行く者からも光を奪い心に深い傷を残す。過去の過ちはとり消すことは出来ない。しかし、今を生きている私たちに出来ることは、たくさんあるはずだ。前向きな気持ちで交流することによって良好な関係を築いていくことが、私たちに出来る。

戦争は憎しみや欲望から始まるのではないだろうか。そのような狭い視野を持つのではなく、国を超えて相手を思いやる気持ちを持つことが大切だと思う。自分の国が幸せで自分達が幸せならそれでいいと考えるのではなく、異文化を学び認め合い、尊重することができれば未来の平和(フナ)が実現するのではないだろうか。私は英会話を習い始めた。英語など他の国の言葉や文化を勉強して異なる思考の人たちの架け橋になりたいと考えたからだ。作品の最後にこう書いてあった。「むごい、むごい、むごい、なひてががあして別れにゃいけんのかい、このよな別れが未代まで二度とあっちゃいけん、あんまりむごすぎるけえのう」

嫌いな本が 教えてくれる 1年6組 荒井 優

私が初めてこの本を読んだのは小学校五年生の時だ。表紙にうつっているかわいい犬の写真に惹かれ、この本を選んだ。

私は同じ本を何度も読むことが好きなのだが、この本に関しては違った。毎日私たちに癒やしを与えてくれる犬や猫が殺処分されているなんて考えるのが嫌でこの本を読むのは嫌いなのだ。しかし、私はこれまでに何度もこの本を読んでいる。それは文中に出てくる「ぼくたち、灰になるために生まれてきたわけじゃない」という言葉に、「読まなければいけない」という気持ちにさせられるからだ。

私がこの本を読んで毎回強く思うことは、この悲しい事実をたくさんの人に広めなければならぬということだ。そのためにはまず自分が犬や猫の現状についてよく知るべきだと思っ、中学生の時に私は動物愛護ボランティアに参加した。ボランティアの内容は、動物愛護センターの施設見学や犬舎の清掃、犬の散歩やフラスティングなどだった。犬たちと触れ合うことでできる散歩や清掃はとても癒された。しかしその一方で施設見学の際に処分機を見た時はとても胸が苦しくなった。今までに文字からの情報だけでなく想像だったものが目の前に現れたことにより急に身近なものに感じられるようになったからだ。このボランティアを通して私は保護された動物の生活を知ると共に命を助けることの難しさをまなぶことができた。

また、本の主人公の愛媛県動物愛

では、受賞した文章をデータ化し、受賞者の許可を得て全文を今回掲載した。ぜひ一読してもらいたい。

猫、このような子たちが飼い主の手によって愛護センターに持ち込まれるといった事実だ。そしてその多くが「引越先が動物が飼えないところだから」「言うことを聞かない」「飽きた」などの人間の勝手都合によって持ち込まれているのだと思う。

私はこの本を読むのが嫌いだ。私たちが人間に癒しを与えてくれ、人間と動物の絆や命の大切さを教えてくれるかわいい小さな命たちが人間の手で殺されているのを感じたくないから。飼い主によってセンターに持ち込まれても、それでも、処分機の中で二酸化炭素ガスを吸って意識を失うまで飼い主が自分のことを迎えてきてくれると信じている犬猫たちがかわいそうでならないからだ。同じ命なのにこんなにも生き方が違うことに腹が立つからだ。しかし私は、これからは何度かこの本を読んだらう。それは、伝えなければいけないと思うからだ。ペットショップで高額で売られている犬猫がいるのと同時に幸せを知らずに殺される犬猫がまだいるということ、その犬猫全てが飼い主を待っているということ、私たちは絶対に忘れてはいけないのだ。他人事だと思っ、自分では殺処分は無いからいい、自分では悲しい事実を知らずして、それを他の人に伝えようとすれば、いつの日か必ず殺処分は無くなる、私は信じている。だからこそ私はこの本をずっと大切にしようと思う。

この本にはたくさんのおもしろい事実が描かれている。まだ生まれて間もない子犬や子猫、または長年飼

「大切なのは、ペットを『飼う』という行為ではなく『愛する』ことだ。私は中学一年生の夏、二匹目に迎え入れた四ヶ月の白い子猫を病気で亡くした。病

は、まだ治療法が見つかっていない。毎日名前を呼びながら泣いたり、好きなおやつをたくさんやったりと、愛情をたくさん注いだ。亡くなった時とても悲しかったけれど後悔はなかった。それはこの本から学んだ「ペットを幸せにしたい」という気持ちがあったからだ。私は思っている。また、この子の死があったからこそ残りの二匹を今以上に幸せにしようと思うようにもなった。

この本にはたくさんのおもしろい事実が描かれている。まだ生まれて間もない子犬や子猫、または長年飼

また、本の主人公の愛媛県動物愛

「大切なのは、ペットを『飼う』という行為ではなく『愛する』ことだ。私は中学一年生の夏、二匹目に迎え入れた四ヶ月の白い子猫を病気で亡くした。病

は、まだ治療法が見つかっていない。毎日名前を呼びながら泣いたり、好きなおやつをたくさんやったりと、愛情をたくさん注いだ。亡くなった時とても悲しかったけれど後悔はなかった。それはこの本から学んだ「ペットを幸せにしたい」という気持ちがあったからだ。私は思っている。また、この子の死があったからこそ残りの二匹を今以上に幸せにしようと思うようにもなった。

この本にはたくさんのおもしろい事実が描かれている。まだ生まれて間もない子犬や子猫、または長年飼

また、本の主人公の愛媛県動物愛



書名：『父と暮らせば』
著者：井上ひさし
出版社：新潮社

書名：『犬たちをおくす日』
著者：今西乃子
出版社：金の星社